

ニキータ・アレクセーエフ「日本についての書簡」¹

Никита Алексеев и Япония

鴻野わか菜

Wakana KONO

本稿は、ロシアの現代美術作家ニキータ・アレクセーエフが書き下ろした日本についてのテキストの全訳と改題である。

1. ニキータ・アレクセーエフ略歴

ニキータ・アレクセーエフは、1953年、モスクワで生まれ、1960年代末からモスクワの非公式芸術界で活躍した作家である。1969年に詩人でアーティストであったアンドレイ・モナスティルスキー、レフ・ルビンシュテインらと知りあい、緩やかな芸術家グループを形成し、1970年代半ばからは、モナスティルスキーらと共に郊外でパフォーマンスを行う〈集団行為〉という活動の中心メンバーとして活躍した。

1982年から84年にかけて、モスクワの自宅のワンルーム・マンション全体をインスタレーションに変える展覧会を継続して行い、それを〈APTART〉(〈Apartment〉と〈Art〉から成る造語)と名づけ、アンダーグラウンドの芸術界に新しい潮流を生みだした。1987年から1993年をフランスで過ごし、帰国後は世界各国でレジデンスを行いながら、モスクワ北部のアトリエで、しばしばテキストを伴うドローイングを制作し続けている²。

アレクセーエフは、「ロシアの日本人」と仲間達から呼ばれるほど日本文化に傾倒した作家である(一方でモナスティルスキーは「ロシアの中国人」と呼ばれていた)。ロシア、ソ連では、20世紀初頭の「ジャポニスム」の時代に続き、1960-70年代にも日本文化への関心が高まり、日本文学・文化の書籍が多数刊行され、現代詩人や芸術家にも強い影響を与えたが、アレクセーエフもまさにその一人である。アレクセーエフの代表作である連作ドローイング〈帯木の宮殿〉が、信濃の伝説で『万葉集』や『源氏物語』等の日本の古典文学にも登場する「帯木」の物語を主題としているように、日本の文学や思想は、アレクセーエフの創作の源泉のひとつであり続けてきた。

¹ 本研究はJSPS 科研費 15K02404 の助成を受けた。

² ニキータ・アレクセーエフについては、以下の文献を参照。鴻野わか菜「ニキータ・アレクセーエフ「テーブルクロス、野菜、プーチンの女性の化身」展『生存と共生—人文学の現在』(鴻野わか菜編)千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書第304集(2016年)107-109頁。

2. テキスト「日本についての書簡」の特徴

今回訳出したアレクセーエフのテキストは、2012年8月27日に書かれ、訳者宛に送付された未発表の文章である。このテキストは、「日露文化の比較と交流をテーマとする往復書簡形式の書籍としていずれ出版したい」という明確な意図のもとに書かれている。今回、日本語訳を発表するにあたって、アレクセーエフは、2016年12月の初来日の体験を描いた最後の4段落を加筆している（加筆は2017年2月17日）。

1960年代から現在に至るまでのアレクセーエフの日本文化体験を綴った本テキストは、アレクセーエフの創作や、ソ連非公式芸術における日本、東洋文化への関心を理解するために役立つだけでなく、ソ連後期における日本文化の受容全般を理解するために貴重な文献である。1960-70年代ソ連の「ジャポニスム」は、同時代とそれ以降のロシア文学、美術に大きな影響を与えたが、その現象を論じた研究や、日本文化に傾倒した作家達の回想記等の文献は今までほとんど出版されてこなかった。本テキストでは、1960-70年代のソ連の文化人が日本についてどのような書籍を読み、映画を鑑賞し、どのような観点から日本に関心を持ったかということが、多面的かつ詳細に記述されている。本テキストに書かれている日本文化受容の具体例（黒澤映画、ニコライ・コンラッド『東洋と西洋』、エヴゲーニヤ・ザヴァツカヤ『西洋における東洋』、禅、被爆国への思い）は、アレクセーエフを中心とする現代美術作家だけでなく、訳者がこれまで聞き取りをしてきた詩人、作家、文学者、さらには、訳者が日本人であるを知って、ほとんどすれ違いざまのような短い偶然の出会いの中で自分の「日本体験」を熱く語ってくれた無数のロシア人の回想とも重なる部分が多々あり、そうした意味で、1960-70年代ソ連における日本文化受容の特徴を広く映し出すテキストであると感じている。

ブレジネフ期のソ連で日本文化が流行するとともに、日本文化のみならず他の様々な海外文学や思想書が盛んに翻訳され受容されたことは、日本ではあまり知られていない。しかし、それを学ぶことは、日露文化交流史の側面から有意義であるだけでなく、閉塞した政治・社会状況の中で海外の文学・翻訳・文化が人々の心の支えとなった実例を知るという意味でも重要である。停滞した社会において、外国文学や外国文化は、人々の精神的な亡命、内的自由の手段となったのである。

3. 来日——北アルプス国際芸術祭

アレクセーエフは、このテキストを最初に書いた2012年8月の時点では、体調等の理由から日本に来ることはないと考えていたが、北アルプス国際芸術祭（長野県大町市、2017年6月4日～7月30日）に参加することが決まり、下見と準備のために2016年12月に初来日を果たした。

信濃の伝説を主題とするドローイングを代表作とするアレクセーエフにとって、ほかならぬ長野の地を訪れ、そこで制作することは、夢のような出来事だったという。来日の前から大町市の写真や地図を眺め、大町では湖畔や数々の寺社、川辺、森林、商店街を歩き、民話、湖の伝説、寺や神社の縁起、産業、地理を学び、あさひ AIR（あさひアーティスト・イン・レジデンス）の拠点を訪れて大町の歴史資料を読み、作品を鑑賞したアレクセーエフは、大町の歴史、自然、文化に深く共感し、この土地に捧げる連作〈ちか

く-とおく-ちかく」というプロジェクトを、現在構想している。一式108枚のドローイングから成る連作を、人々の生活の場であり、アレクセイエフがその独特の美しさに打たれた大町の商店街に貼るというプロジェクトである。アレクセイエフは「北アルプス国際芸術祭の開かれるこの素晴らしい町で、自分の箒木を「植える」ことを夢見ているのです」と語っている。食堂、店の看板や広告と同じ場所に自分の絵を貼るという行為には、自分も縁あって訪れた大町の一部になりたい、その自然と生活の中に溶け込みたいという作家の思いが託されている。

アレクセイエフは、北アルプス国際芸術祭のプロジェクト〈ちかく-とおく-ちかく〉に寄せた解説文で、次のように書いている。

私は何10年も前から、『源氏物語』や日本の他の古典文学に登場する「箒木」というイメージに深い関心を抱いてきました。「箒木」とは、到達できないものというイメージです。箒木を目にして、近づいていき、触れることができるほど近くにきたと思っても、木はいつのまにか遠くにあるのです。また近づいていくと、木はまた消えてしまいます。これが永遠に繰り返されるのです。

アレクセイエフが大町のために制作した絵も、以下に訳出したテキストも、日本の風景や文化への愛を描いた「ラブレター」のような性格を持っている。それと同時に、近づこうとしても近づけない「箒木＝日本」という、異文化理解の難しさも表現されている（商店街の広告や看板と自分の絵を併置するというこのプロジェクトには、同化ではなく共生によって新しい光景を作り出していくという意味を読み取ることができるのではないか）。

アレクセイエフの作品、そして本テキストは、異文化、あるいは他者との完全な合一という安易な幻惑には目もくれず、自分の相違を痛感しつつも他者に惹き付けられ歩み寄ろうとする人間の運命を描いたもののように思える。

* * *

ニキータ・アレクセイエフ 「日本についての書簡」

親愛なる友よ

私は恵まれていました。まだ子供の時分から、日本美術の華麗な作品を手にする機会があったからです。

私の母は、ヤロスラフ・マヌーヒン³と親しく交流していました。彼は画家としてはほとんど無名ですが、モスクワでもっとも主要なコレクターの一人でした。彼はイコンやありとあらゆる骨董品を蒐集していましたが、なかでも特に見事だったのは、広重、歌麿、北斎の何 10 枚もの版画、刀の鏝、見事な根付のコレクションでした。

彼の根付のコレクションには暗い噂がありました。清朝最後の皇帝、愛新覚羅溥儀のコレクションを、ソ連の将校が奪ってモスクワに持ち帰り、やがてその一部が東洋美術館に現れ（私は幼年時代から青年時代にかけて、東洋美術館のそばに住んでいました）、別の一部がマヌーヒンの手に渡ったというのです。私は、素晴らしい品々を手にとりてすっかり魅了されたことを覚えています。今でも私は〈富嶽三十六景〉と歌麿の見事な美人画を一枚ずつ持っていますが、それはかつてヤロスラフおじさんが母に贈ってくれたものです。

そう、もちろん、ゴッホについて言及しないわけにはいきません。ゴッホは子供の時から私の最愛の画家の一人ですが、日本美術がなければ彼はあれほどの画家にはなっていなかったでしょう。

1960 年代末から 70 年代初頭のモスクワでは、日本にまつわるあらゆるものがブームになりました。進歩的な知識人達は、生け花を習おうとし（あれは本物の生け花といって良いものだったと思います）、自分の別荘（ダーチャ）に「日本風」庭園を作ろうとしました。当時、黒澤明の『羅生門』は熱狂的に受け入れられましたが、私がより感銘を受けたのは『隠し砦の三悪人』でした。あの映画ではいつも雨が降っていて、反目しあう侍達が手紙を交わし合うのですが、紙の代わりに木蓮の花びらを使って、それを小川に流すのです。この映画では、主人公と敵が狭い道で顔をつき合わせ、決闘する天才的ともいえる場面がありました。男達は、羽を逆立てる雄鶏のように向き合って、2 分近く身動きしません。その直後、三船敏郎が電光石火の勢いで敵の首を打ち落とし、黒い血が噴水のように吹き出すのです。

ところで、グリゴリー・チハルチシヴィリ⁴が、後年あのペンネームを思いついたのも、青年時代にこの映画を見たからではないかと思います。彼のペンネームであるボリス・アクーニンは日本語の「悪人」をもとにしていると聞いていますから。

もう少し映画についての話を続けましょう。子供の頃に見た 1930 年代の馬鹿げた映画では、金齒とヒトラーのような口ひげのある日本の将校達がひどく風刺的に描かれたのを覚えています。でも他方で、アンドレイ・タルコフスキーの『惑星ソラリス』のような映画もありました。私はこの映画が今でも大好きですが、初めてこの映画を見た時、東京で撮影されたシーン——何層にも入り組んだ高速道路、高層ビル、

³ ヤロスラフ・マヌーヒン（Ярослав Манухин）1925 年生まれ。1953 年、スリコフ記念国立モスクワ美術大学卒業。画家、挿画家、ポスター画家として活動。

⁴ グリゴリー・チハルチシヴィリ（Григорий Чхартишвили）1956 年生。日本文学研究者・翻訳家、小説家。1988 年よりボリス・アクーニン（Борис Акунин）の筆名で作家活動を始める。探偵小説「エラスト・フェンドーリンの冒険」シリーズは、ロシアでベストセラーとなった。邦訳には、『墮ちた天使 —アザゼル』沼野恭子訳（作品社、2001 年）、『リヴァイアサン号殺人事件』沼野恭子訳（岩波書店、2007 年）、『アキレス将軍暗殺事件』沼野恭子・毛利公美訳（岩波書店、2007 年）等がある。

低層の伝統的なスタイルの小さな家々——に驚嘆しました。

そしてもう一つ、とても大事なことを思い出しました。子供の頃、そして青年期に差し掛かった頃、私は多くの人々と同様に、核戦争を怖れていました。広島や長崎のことを思うと、恐怖で身がすくむ思いでした。

1960年代末から、極東の文化、とりわけ日本文化を解説し一般に広めようとする書籍や、西洋と東洋の美術の諸現象の類似性を論じた書籍が出版され始めたことは、とても重要な意味を持っていました。たとえば、アカデミー会員だったニコライ・コンラッド⁵の『東洋と西洋』⁶は議論の余地のある本ですが、面白い内容を多々含んでいました。しかし、より有名だったのはエヴゲーニヤ・ザヴァツカヤ⁷の著書『西洋における東洋』で、禅についても解説していました。今思えば、ヘルマン・ヘッセ、リルケ、そしてなぜかグスタフ・マーラーを平安時代の文化と結びつけたおかしな本でもありました。でも、ブレジネフ期のどんよりした陰鬱な時代にこうした本を読むことは魅力的でした。ですからザヴァツカヤには感謝しています。それに彼女は、画家としての私に大きな影響を与えた中国の彩色版画絵手本である『芥子園画伝』も翻訳したのです。

当時、『万葉集』、『古今和歌集』、清少納言、兼好法師の『徒然草』、芭蕉、そして他にも数多くの日本の古典文学がロシア語に翻訳されました。ロシアの日本文学翻訳者は優秀であると言われていています。私は日本語が分からないのでそれを判断することはできませんが、それは本当ではないかと思っています。ところで、ずっと前に『徒然草』を私に贈ってくれたのはレフ・ルビンシュテイン⁸でした。あの頃、多くの人が中国と日本に熱中していました。私とアンドレイ・モナスティルスキー⁹は、『西遊記』に登場する猿の仙人である孫悟空の物語や『三国志』、『水滸伝』に読み耽りました。そして、私達ロシア人にとって分かりやすいとは言えなかったのですが、1970年代初頭に出た雅楽のレコードを聴いていました¹⁰。

当時、アレクセイ・リュビーモフ¹¹、マルク・ペカルスキー¹²、タチヤナ・グリンデンコ¹³などの素晴ら

⁵ ニコライ・コンラッド (Николай Конрад) 1891年生、1970年没。東洋学者。日本文学、中国文学の翻訳者としても知られる。

⁶ 原題は「Восток и Запад」で、1966年にモスクワでナウカ社より出版され、1972年に第二版が出版された。邦訳有り。ニコライ・コンラッド『東洋と西洋 (上巻) 東方のルネッサンス』『東洋と西洋 (下巻) ヒューマニズムの形成』大沢正訳 (理論社、1969年)。

⁷ エヴゲーニヤ・ザヴァツカヤ (Евгения Завалская) 1930年生、2002年没。東洋学者、歴史家。中国美術、日本美術、中国思想についての著書があり、中国文学をロシア語に、オシプ・マンデリシュタムなどの詩を中国語に訳した。『西洋における東洋』の原題は「Восток на Западе」であり、1970年にモスクワで出版された。

⁸ レフ・ルビンシュテイン (Лев Рубинштейн) 1947年生。詩人、文筆家、現代美術作家。

⁹ アンドレイ・モナスティルスキー (Андрей Монастырский) 1949年生。詩人、現代美術作家。1970年代半ばからは、アレクセイ・エフらと共に郊外でパフォーマンスを行う〈集団行為〉の中心メンバーとして活躍した。

¹⁰ アレクセイ・エフは、2016年12月14日に千葉大学文学部で「ニキータ・アレクセイ・エフ、作品と日本について語る」という公開セミナーを行ったが、そのセミナーでは「私達は雅楽に合わせてしばしば踊ったものです」と語っている。

¹¹ アレクセイ・リュビーモフ (Алексей Любимов) 1944年生。ピアニスト、オルガン奏者、指揮者。

¹² マルク・ペカルスキー (Марк Пеккарский) 1940年生。パーカッション奏者、指揮者。

¹³ タチヤナ・グリンデンコ (Татьяна Гринденко) 1946年生。バイオリン奏者。

しい音楽家達が、半ばオフィシャルで半ばアンダーグラウンドのコンサートを開き、第一部ではルネサンスやバロックの時代の音楽を演奏し、第二部ではミニマリストの音楽を、そして特に重要なことですが、ジョン・ケージの音楽を演奏していました。ジョン・ケージは、ご存じのように、鈴木大拙の弟子で、彼とつながっていました。

ケージは、モナスティルスキーと私にとって文化的な英雄だったと言っても誇張ではありません。70年代末に私が引っ越した際、新しいアパートの部屋の番号が433だったのには感動しました！（ピアニストがピアノの前に座り、鍵盤に触らずに4分33秒過ぎて立ち去るというケージの有名な「4分33秒」の数字だからです。）その後、このアパートでギャラリー〈APTART〉を始め、何年か活動しました。

私は日本語は少しも分かりませんが、日本文化を理解しようと試み、「幽玄」や「もののあわれ」といったものを体験しようとしてきました。たしか1973年の秋、ピャチゴルスクのサナトリウムにいた時のことです。また暖かみのに突然雪が降り出し、花々や松がうっすらと雪を被り、霧が漂っていました。それはなんて「日本的」だったことでしょう！

ある時期、私は、海外文学図書館で朝から晩まで過ごし（またしても宿命のように、その頃は図書館のすぐ近所に住んでいたのです）、鈴木大拙の『禅論文集』と、イギリスの禅研究者アラン・ワッツが出版した公案集と禅の師についての書『禅の肉、禅の骨』をノートに手書きで写し、自分なりに翻訳し、タイプライターで訳を打ち直して、友人達に3部配りました。90年代初頭に偶然、モスクワの本屋でひどい印刷の本『禅の肉、禅の骨』を見つけ、開いてみたところ、恐ろしいことに、私の訳が編集もされずそのまま出版されているのを知りました。ひどいものでした。ソ連が崩壊する10-15年前の生活がどのようなものだったか想像できるでしょうか。異なる時代、異なる文化を単純に比較しようとするのは、もちろん問題もはらんでいますが、それは19世紀前半の日本に少し似ていたのではないかと思います。もっとも、ソ連は核を保有する超大国だったという違いはありますが……

そういう状況は袋小路であり、知識人の間では、神の探求が盛んになるのも不思議ではありませんでした。私が1975年から81年まで属したグループ〈集団行為〉では、神秘的な体験や宗教的儀式がとても重要な意味を持っていました。最初、私達は「穴のない笛」や「隻手音声」といった公案について語りあっていたのですが、徐々にアンドレイ・モナスティルスキーとニコライ・パニコフ¹⁴は、ゲオルギイ・グルジェフ¹⁵、ピョートル・ウスペンスキー¹⁶の『ターシャム・オルガナム』、カルロス・カスタネダ、偽ディオニュシオス・ホ・アレオパギテースに関心を持ち始めました。やがてアンドレイの関心は、ギリシャ正教の修道士達による書物『フィロカリア』に移り、彼は断食と祈りを始め、我を失うほどのめりこみまし

¹⁴ ニコライ・パニコフ（Николай Панитков）1952年生。現代美術作家。オブジェ、コラージュ、アーティストブック等を制作。モナスティルスキー、アレクセイエフらと共に〈集団行為〉のメンバーとして活動した。

¹⁵ ゲオルギイ・グルジェフ（Георгий Гурджиев）1866年生、1949年没。神秘思想家。主著に、宇宙、文明、歴史について語った『バルゼバブの孫への話——人間の生に対する客観的かつ公平無私なる批判』がある。

¹⁶ ピョートル・ウスペンスキー（Петр Успенский）1878年生、1947年没。神秘思想家。『ターシャム・オルガナム』（1911年）は、神秘学と科学の融合をはかったウスペンスキーの主著。

た。幸いなことに、モナスティルスキーは、その狂気の体験を秀逸なエッセー『カシルスコエ街道』に昇華させています。

そして私も、ひょっとして早まったのかもしれませんが、正教徒であるロシア人としての「起源」を持っているのだから、どこか外部に真実を探す必要はないだろうと思い始めました。そしてロシア正教に入信したのです。今は、それを後悔しているわけではありませんが、なぜあんなことをしたのか自分でも分かりません。ただ、私に洗礼を授けたのは、ドミートリイ・ドウトウコ神父という風変わりな人物で、私にとってとても重要なことを言ってくれました——「なにも怖れるな。神は、あなたが堪えられない痛みはお与えにならない」。私はもう信者ではありませんが、この言葉は信じています。この言葉は、たとえば、慧能が悟りを求める弟子の額を警策で叩きながら口にする言葉としてもふさわしいのではないかと思います。

こうして月日が過ぎ去って行きました..... 私は日本車や電化製品を目にした（シトロエンやバング & オルフセンの方がやはりいいですが）、兼好法師を読み返したりしました。ロシアは、いわゆるステレオタイプを引用するなら「金歯のある日本のスパイ達（しかも対馬でロシアの軍艦を沈没させたのですし）」に千島列島を渡さないだろうということも、日本人も、多数のカニがいて、『隠し砦の三悪人』の血の場面のように石油が空に吹き上げる陸棚を諦めないだろうという政治的な状況も徐々に分かってきました。

私は、1993年にパリで「帯木の宮殿」展を、2004年にローマのアメリカ・アカデミーで「帯木の宮殿における犬ロッキーの幻影」展を開催しました。これらの展覧会に出展したドローイングは、自分で言うのもおこがましいのですが、わりと評判が良いのです。

あなたが以前、「帯木」について説明してくれたことに感謝しています。帯木とは、近づこうとすると遠ざかっていき、それについて忘れようとする追ってくるものだと思っています。木の種類は檜ですね。

そしてその木は、古びた帯のような形をしていますが、それは現実世界からゴミを掃き出すことができるから、そしてそうしなくてはならないからだと思います。

親愛なる友よ、私は日本語は分かりませんし、日本に行ったこともなければ、いつか行くこともないでしょう。でもそれに対して、あなたがロシア語がよく分かり、長い間ロシアで暮らしたということがとても大切なんです。

【以下、2017年2月加筆部分】

日本の友人達のおかげで、奇跡としか言いようのないことが起こりました。私は日本に行き、2週間を過ごし、夢にも思わなかったものを見たのです。いえ、帯木は見ませんでした。帯木はずっと前に落雷で焼けてしまったし、根元は残っているのですが、私は急な山道を登れない体なのです。でも友人達が帯木

の根元から剥がれ落ちていた木切れを持って来てくれました。それは私にとって仏陀の歯よりも尊い貴重な聖遺物です。

その他の様々なものを見ました。日本美術の傑作を見ましたし、奈良では聖なる鹿を撫で、いくつもの滝や驚くべき景色にみとれ、東京と京都を散策しました。ロシア人が初めて足を踏み入れたのではないかと思われるような村も訪れました。

日本滞在を経て、私は日本をより深く理解するようになったのでしょうか。いえ、その逆です。私が以前考えていたことと、私が新しく知ったことが混ざり合ってしまった。でも、これが、15世紀のカトリックの神学者ニコラウス・クザーヌスが「知ある無知 (docta ignorantia)」と名づけたものであったならと願っています。

もしそうなる定めなら、私は日本に戻るでしょう。その時、私は、日本は帯木のようなものであることを知りながらも、少しでもそれに近づこうと努力することでしょう。

ニキータ